

佛教大学総合研究所 共同研究プロジェクト「現代社会における宗教の力」
公開シンポジウム「震災後と宗教～東日本大震災後の支援や追悼に果たす宗教の役割～」
趣旨説明

2016年3月3日
大谷栄一（佛教大学）

【1】宗教者や宗教団体の震災救援活動や復興支援活動

- ・ 2016年3月11日で東日本大震災発生から5年を迎える。
- ・ 2016年2月10時点での警察庁の資料¹によると、死者は1万5,894人、行方不明者は2,562人、計1万8,456人を数える。
- ・ この大惨事に際して、震災発生直後から、数多くの宗教団体や宗教者が支援活動に取り組んだ。たとえば、稲場圭信・黒崎浩行編『震災復興と宗教』（明石書店、2013年4月）には仏教界、神社界、キリスト教界、新宗教界の震災救援活動や復興支援活動が紹介されている。
- ・ しかし、こうした宗教者や宗教団体の取り組みに対する社会の認知は低い。庭野平和財団が2012年4月に実施した「第2回 宗教団体の社会貢献活動に関する調査」。この調査は、全国の20歳以上の男女4,000人を対象にした質問紙調査（有効回答数1,232人、30.8%）。
- ・ 多くの宗教団体が行ったさまざまな支援活動の中で、よく知られていたのは「神社や寺院、宗教団体の建物が避難場所となっていた」29.7%、「僧侶が亡くなった人の葬儀や慰霊を行っていた」26.9%だった。「慰霊」は「神職が慰霊を行っていた」12.3%を合計すると4割近くに達する。しかし、「葬儀や慰霊」以外の宗教活動は、ほとんど知られておらず、「ひとつも知らない、わからない」と回答した者が5割ほどいた。

【2】現在も続く復興支援活動

- ・ しかし、その一方、被災地の復興支援活動以外の活動も含めた「宗教の社会貢献活動」が東日本大震災以降、マスコミや宗教界、研究者の間で注目されるようになった。ただし、マスコミでも宗教者や宗教団体による被災地での支援活動に関する報道が減っているのは明らかである。
- ・ じつは、現在も被災地での復興支援活動は続いている。現在も現地や各地で被災者や避難者への支援活動を行っている宗教団体や宗教者は少なくない。
- ・ 1年半ほど前、今回の共同研究の調査の一環として、研究メンバーとともに、2014年8月、仙台、石巻、塩竈市浦戸地区寒風沢島を回ってきた。その際、カトリックのシスターたちの取り組み、浄土宗僧侶の取り組みについてお話を伺うことができた。献身的に活動されているシスターたちの思い、被災された檀家の方々のケアに努めているご僧侶の姿勢が印象的だった。また、仮設住宅で生活されている方々のお話もお聞きすることができた。

¹ 「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」
(<https://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf>、2016年3月3日アクセス)

【3】 今回のシンポジウムの内容とねらい

- ・ 震災から 5 年を経た現在、あらためて東日本大震災後の支援や追悼に果たす宗教の役割を問い直したい。
- ・ とくに今回のシンポジウムでは、「関西」という視点から、震災後の宗教の役割をあらためて考えてみる。滋賀教区浄土宗青年会の近江米一升運動による被災地支援活動と、東日本大震災の影響で故郷を離れ、京都で避難生活をされている方々に京都の社寺での祈りを通じた支援活動についてお話いただく。
- ・ さらに、1995年の阪神・淡路大震災から 21 年が経過した今日、「旧」被災地となった阪神・淡路での慰霊と記憶の継承についてもお話いただく。
- ・ 三木英先生が去年 6 月に刊行された『宗教と震災——阪神・淡路、東日本のそれから』（森話社）の中で、次のように述べている。

「いま、これから宗教に何ができるか。宗教が何をすべきかを、阪神・淡路大震災のフィールド・ワークから得た知見を基として、考えていこう（中略）立ち直りの道を歩む被災者に対し宗教がどう働けるのか、悲劇を風化させないために宗教はどう貢献できるのだろうか。」（15 頁）

- ・ このシンポジウムでも、この問いを引き受け、震災後の宗教の役割について再考し、「現代社会における宗教の力」の意義を問い直したい。